

「改革」に希望を添えて



山 本 博 之

皆さまにはそれぞれのお気持ちで新たな年をお迎えのことと思います。昨年8月に、故・大谷前会長の後を受け、会長を拝命することとなりました。旧年中は多くの会員、事務局員の皆さま、関係各位の多大なるご尽力により、本学会の活性化に向けた様々な活動が行われましたことに、心より御礼を申し上げます。本年も引き続きのご協力をお願いいたしますとともに、皆さまにとり、良き年と未来につながりますことを強く念じております。

この原稿を書くにあたり、過去10年ほどの新年の巻頭言を改めて読み直してみました。社会情勢、学会の置かれた状況、新型コロナウイルス感染症の動向等々、毎年のトピックスに応じて書かれているテーマは変化していますが、「学会をよりよく、未来に向けて、その裾野を広げて…」といった学会をプラスの方向に向けるための視点が必ず盛り込まれている点は一貫しています。

ここ数年、本学会の困難な状況に対して様々な改革がなされていることは皆さまもお気づきかと思えます。本誌の電子化や年会討論会参加登録時のシステム変更など、そのいくつかは直接的な変化として感じられていることでしょうか。これらの改革については既に学会財政の健全化に大きく貢献しており、これまでの会長の諸先生方の様々な想いや大谷先生の遺志への深い敬意の念とともに継承されるべきものと考えています。同時に、どのような状況にあっても人は「夢と希望」をもち、楽しい未来を思い描けなければコミュニティへの求心力がなかなか働かないことも事実であろうと思えます。

私たちは「学会」を通じて何を追い求めているのでしょうか。会員の皆さまが研究・技術についての議論を通じてより良い成果に結びつけることだけでなく、ともに活動する仲間を得たい、学術・産業上の成果によって社会に貢献したい、さらには学会の「あるべき姿」を実現させたい… などなど、そこには「分析」というキーワードを通じて、会員の皆さま一人一人に応じた未来像ともいうべき自己実現の姿が描かれているのではないのでしょうか。

このような未来像を調和ある形でともに達成させ、会員内外の皆さま方が大いに参加してみたい、と思えるようなコミュニティを形作ることが学会執行部や理事会の使命と思えます。もちろん学会としての経営を成り立たせる、との大前提があり、国レベルでの人口減少を見据えた学会のスリム化や間断ない経費削減の努力は必然的にあるものの、そのような中であっても希望が見いだされなければ学会の発展はおぼつかないように思えます。そのためにも支部や研究懇談会だけでなく、既存の枠組みにとらわれずに情報を共有しつつ様々な意見に触れる機会をもてれば、と考えています。

コロナ禍に伴い、人と会うことがままならない状況を数年経験してみると、「会う」、「話す」、「互いを理解する」といった基本的な行動が学会の調和と発展の基礎であるように改めて思います。学会の運営状況にも目を配りつつ交流を深め、皆さまの夢に向けてともに歩むことができれば、これほど喜ばしいことはありません。是非様々な機会を通じ、それぞれの場所で交流し、議論の輪に加わっていただければ幸いです。

〔YAMAMOTO Hiroyuki, 量子科学技術研究開発機構, 日本分析化学会会長〕